

万葉の川心

横浜市立子安小学校 教諭 澤井園子

上野国の相聞往来の歌

(巻第十四 三四〇五番歌)

上野 乎度の多杼里が 川道にも
見らは逢はなも 一人のみして

新しい年が来た。たった一晚過ぎるだけのことなのだが、年末は多くのことが気になって、掃除をし、買い物をし、料理をし、いつものように手順を踏んで新年を迎える。年賀状や絵手紙という文化は、形を変えながらずっと残るのだろうか。それとも、千年も経た後に、昭和平成の風習としてどこかの博物館に展示されて人々に驚かれるのだろうか。人の暮らしは、風変わりな機器とともに次々に変わっていく。ついて行かなければいけないのかもしれないが、実のところすでに落ちこぼれていて、すっかりパワーダウンしている。アルコールで年を忘れ、身を清め、美味しいものをいいただき、どこぞで何がしかの力を借りて、新しいスタートを切りたいと強く願っている。自分の、本来眠る力を呼び起こすものは一体何なのだろう。

万葉集巻十四には、東国から都に伝誦された東歌が集められている。初めは「雑歌」、次に「相聞往来」「譬喻歌」と続き、最後に国名不明の歌が並ぶ。上野国の歌としては、碓氷峠、安蘇、佐野、新田山嶺、伊香保、利根川、多胡山などの歌が選ばれた。「相聞往来」は男女、親子や友人など、親しい間柄で贈答された歌が含まれるが、特に恋の歌が多い。「上野の乎度の多杼里の川沿いの道で、あの子に逢いたい。他に見る人もなく一人だけで。」この歌の具

体的な場所は不明である。ひとり川沿いを歩いていると、向こうから逢いたいあの人がやってくるような気がする。あの人にたどり着けるような気がするという不思議な感覚は、万葉の頃から変わらないのだろうか。川は、未知なるものを運んでくる。そして、自分の中から出したい様々な思いを流してくれる。流した祈りをだれかに届けてくれる。一滴の水は少しでも低いところを探して進む。降る雨が山を抜け、次第に集まり、川を形成し流れていく。時に暴れる龍のごとく、時に癒やしの母のごとく、時に恵みの神のごとく。もちろん出会いの奇跡はめったなことでは起こらない。でも、あの人を想いながら川に沿って歩くこの時間に、奇跡の種は生まれているかもしれない。会えないあの人は川風になって横にいるかもしれない。それを気づかせてくれるのが、時代を超える歌であり、その碑なのだろう。写真の歌碑は、群馬県藤岡市中乙の泡輪神社境内にある。

暮れに、引き出しの奥から文箱が出てきた。中には大切にしていた手紙があり、懐かしく読み返した。画面に並ぶ定型の文字でなく、その人の筆跡がその人をそのまま思い起こさせる。時を経てなお、自分らしく、もう少しゆつくり生きていいのだと語りかけている。



群馬県藤岡市泡輪神社境内